

高等学校

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

教育研究員名簿

No.	学区	学校名	氏名
1	1	都立大森東高等学校	井澤信紀
2	3	都立桜水商業高等学校	福田洋三
3	4	都立牛込商業高等学校	斎藤佳子
4	4	都立工芸高等学校	橋本良夫
5	5	都立日本橋高等学校	浅見浩一郎
6	6	都立水元高等学校	鳥屋尾史郎
7	7	都立八王子工業高等学校	沼田大作
8	8	都立武蔵村山高等学校	伊藤哲朗
9	9	都立武蔵野北高等学校	田中行康

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 出張吉訓

目 次

I	はじめに	1
	1 研究のねらい	1
	2 研究の背景と主題設定の理由	1
	3 研究の進め方	1
II	調査結果から見た生徒の意識と実態	2
	1 人間関係について	2
	2 高校を選んだ理由と理想の教師像について	3
	3 ホームルームについて	4
	4 部活動について	8
III	調査結果に基づいた考察と提言	10
IV	実践事例	12
	1 ホームルーム活動1 ー生徒と教師が心を通わす学級経営ー	12
	2 ホームルーム活動2 ー相互理解を深める指導の工夫ー	15
	3 部活動1 ー相互理解を深め、役割の意識を高める指導の工夫ー	18
	4 部活動2 ー定時制高校における部活動指導の工夫ー	21
V	まとめ	24

研究主題

「集団の一員としての相互理解を図り、自己を生かす能力を養う指導の工夫」

I はじめに

1 研究のねらい

学校教育において、生徒と生徒及び生徒と教師が、豊かで望ましい人間関係を築くために「集団の一員としての相互理解」を図り、それぞれの生徒が集団の中で自己の役割と責任を自覚し、集団生活の改善・向上に進んで協力することによって「自己を生かす能力」を養うための方策を探る。

2 研究の背景と主題設定の理由

特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、(中略)自己を生かす能力を養う。」(高等学校学習指導要領)ことである。ところが、学校の中では、豊かな人間関係を築き、お互いが高め合う「望ましい集団活動」を醸成することが難しくなっているのではないだろうか。その原因としては、社会の激しい変化が、生徒の生活や意識に大きな影響をもたらしていることが考えられる。科学技術の進歩と経済の発展は、物質的な豊かさをもたらした。一方、都市化の進行は、核家族化・少子化・高齢化など地域社会での連帯感や人間関係の希薄化を生じさせた。このため、若者は社会体験や自然体験の機会をもちにくくなり、若者の中に「指示待ち人間」が増加し、若者が自立しにくくなってきている。しかし、若者の中には、「集団活動への憧れ」や「社会参加、社会貢献への意欲」を強くもっているものもいる。それは、阪神淡路大震災のとき、若者がボランティア活動で目覚ましい活躍と貢献をしたことから理解できる。「人は人間関係の中で成長する」と言われる。集団の一員としての人間関係が希薄になってきている生徒に対して、どのようにしたら豊かで望ましい人間関係を築かせることができるだろうか。

本年度教育研究員は、そのためには「集団の一員としての相互理解」を図ることが重要であると考えた。「集団の一員としての相互理解」を図るためには、生徒自身の自己理解、生徒と生徒、生徒と教師、ホームルームやクラブなどの集団での生徒個人と他者との相互理解が大切である。自己理解と相互理解が得られることで、集団の中で自己の役割が明らかになり、その役割を遂行することによって、自己の存在感を実感し、生きがいを見いだすとともに、集団生活の改善・向上に進んで協力する態度、すなわち、集団の中で「自己を生かす能力」が養われていくと考えた。学校で「集団の一員としての相互理解」を図り、「自己を生かす能力」を養うことで、生徒は学校に対する帰属意識や連帯感を高め、楽しく充実した学校生活を送られるようになると考えた。

3 研究の進め方

初めに、学校生活における生徒の人間関係や相互理解の実態を探るためのアンケート調査を行った。次に、アンケート調査の集計と分析を行った。その分析結果を基に、指導方法の工夫を提言としてまとめた。そして、提言にそった実践事例をホームルーム活動と部活動について紹介した。

II 調査結果から見た生徒の意識と実態

学校生活における生徒の人間関係と相互理解の実態を把握するため、9月上旬に研究員が勤務する9校でアンケート調査を実施した。その結果、調査回答数は全日制課程で1,349、定時制課程で227、総数1,576（男子801、女子775）の回答が得られた。

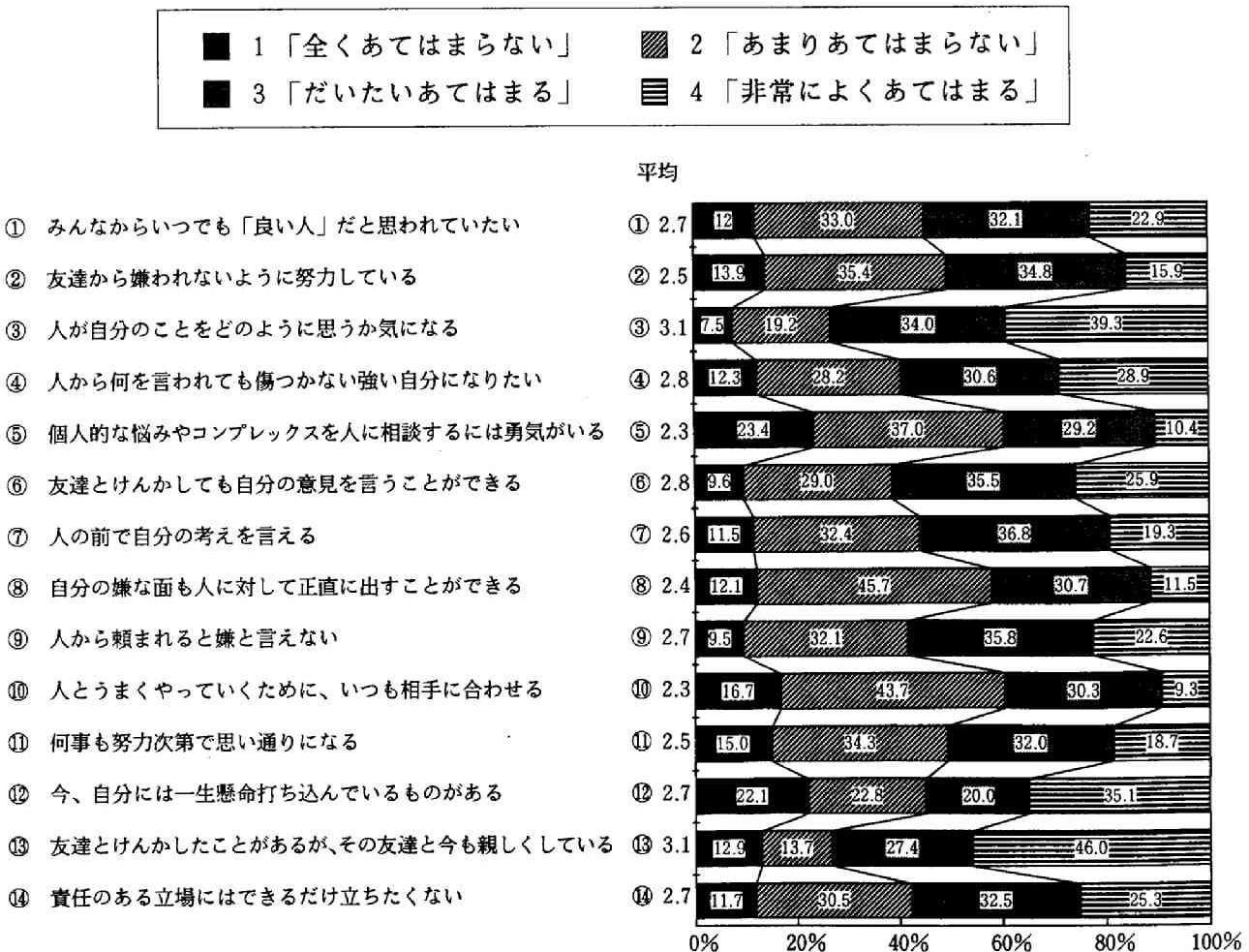
図1から図16までのグラフの数値の単位はすべて％である。

1 人間関係について

人間関係についてどのような意識をもっているかを20項目にわたって質問し、1～4の4段階で回答してもらった。回答の段階をそのまま項目の得点として扱った。これらの質問項目について、因子分析法（主因子法、バリマックス回転）を用いて項目間の相関を調べた。その結果、14項目が主要項目として取り出された。以下がその14項目の回答結果である。

あなた自身について、次の質問項目が「全くあてはまらない」場合が1、「あまりあてはまらない」場合が2、「だいたいあてはまる」場合が3、「非常によくあてはまる」場合が4で、回答してください。（図1）

図1 人間関係について



これらの14項目は、上記の因子分析法によってF 1～F 6の6つのグループに分けることができた。6つのグループが表す「人間関係についての意識」は次の通りである。

F 1 「人目を気にする」	…他の人からどう見られているかを気にする（質問事項①②③④⑤）	平均 2.7
F 2 「自分の意見を言える」	…他の人に対して自分の言いたいことが言える（質問事項⑥⑦⑧）	2.6
F 3 「他の人に合わせる」	…人から頼まれると嫌とは言えない（質問事項⑨⑩）	2.5
F 4 「前向きな姿勢である」	…今一生懸命打ち込んでいるものがある（質問事項⑪⑫）	2.6
F 5 「けんかを修復できる」	…友達とけんかしても仲直りができる（質問事項⑬）	3.1
F 6 「責任を回避する」	…責任ある立場には立ちたくない（質問事項⑭）	2.7

「2 高校を選んだ理由と理想の教師像について」以降のアンケート項目において、その選択肢の中で対比される回答群に対して、F 1 から F 6 のグループごとに平均値の差について検定を行った。その結果、95%以上の信頼性が得られた3-(1)、3-(4)、3-(5)、3-(7)、4-(1)の5つのアンケート項目についてグラフ化した（図A～図E）。

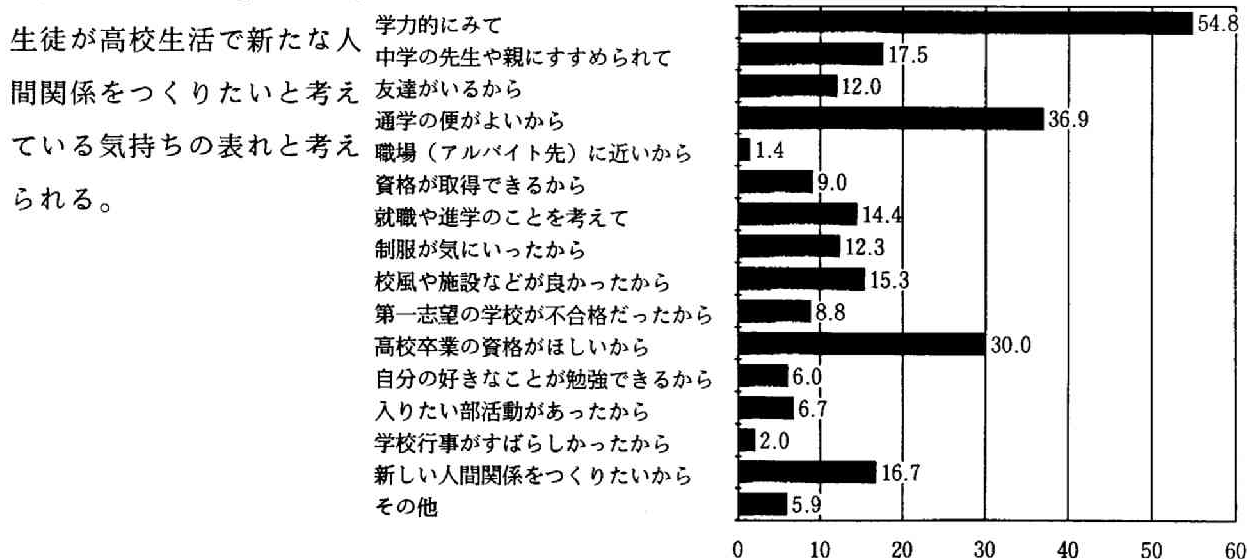
これらのグラフから、アンケート項目ごとに対比する選択肢を選んだ生徒たちが、それぞれにもっている人間関係に対する意識の違いを読み取れると考えた。

2 高校を選んだ理由と理想の教師像について

(1) 「あなたが現在の高校を選んだ理由は何ですか」（3つまでの複数回答）（図2）

「学力的にみて」を選んだ生徒が54.8%と一番多く、次に「通学の便」（36.9%）、「高校卒業の資格」（30.0%）の順である。入学試験に合格できるかが、高校を選ぶ最も大きな理由になっている。「校風や施設」、「好きな勉強」、「入りたい部活動」など、それぞれの学校の教育内容や特色から高校を選んだ生徒は少ない。一方で「新しい人間関係をつくりたい」と思っていた生徒が16.7%いる。これは、

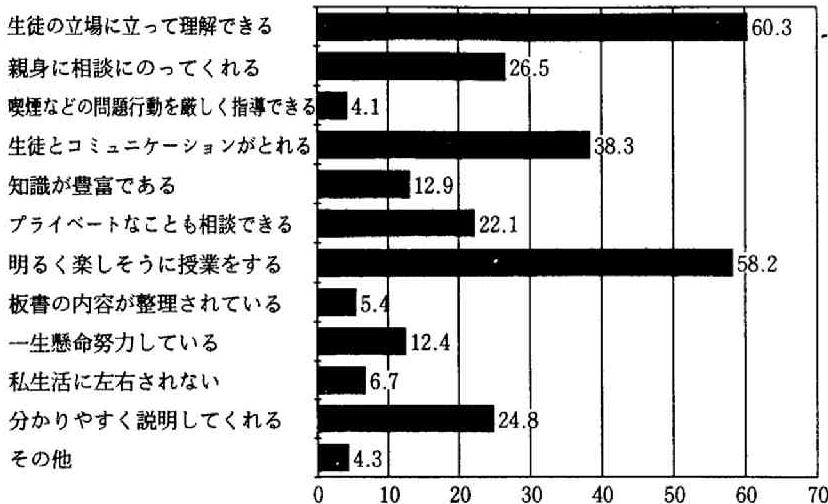
図2 現在の高校を選んだ理由



(2) 「あなたが理想とする教師とはどんな教師ですか」(3つまでの複数回答)(図3)

「生徒の立場に立って理解できる」教師を理想とする生徒が60.3%と一番多い。次に「明るく楽しそうに授業をする」教師が58.2%と支持されている。そして、「生徒とコミュニケーションがとれる」(38.3%)、「親身に相談にのってくれる」(26.5%)と続いている。生徒は教師に自分の考えや言動を生徒の立場で理解して欲しいと望んでいることが分かる。このことから、教師は生徒に迎合するのではなく、生徒の視点に立って生徒を理解していこうとする姿勢が大切である。

図3 あなたが理想とする教師とはどんな教師ですか



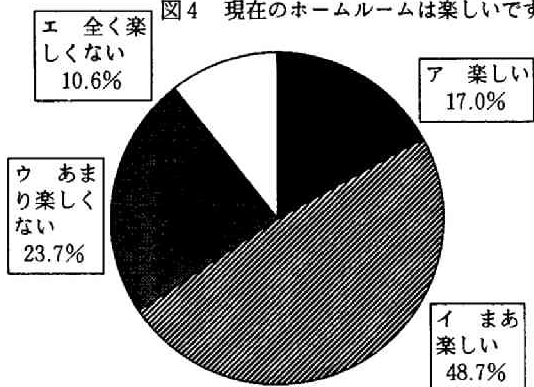
3 ホームルームについて

(1) 「現在のホームルームは楽しいですか」(図4)(図A)

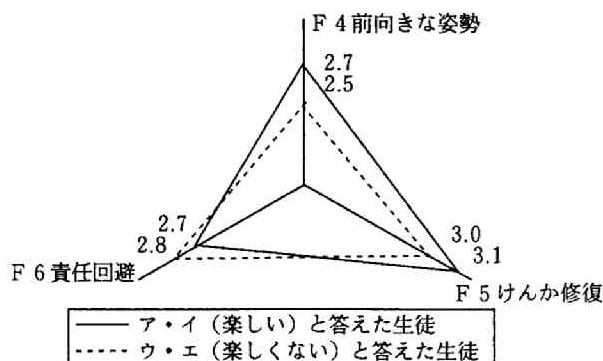
「ア 楽しい」、「イ まあ楽しい」と回答した生徒は65.7%である。また「ウ あまり楽しくない」、「エ 全く楽しくない」と回答した生徒は34.3%である。

図Aからは、ホームルームが楽しいと感じる生徒は、楽しくないと感じている生徒と比較して、自分で打ち込んでいるものがあり、友達とけんかしても人間関係を修復でき、責任ある立場を避けようとしなない傾向がある。このことから、主体的にものごとを考える積極的な生徒の姿が伺われる。

図4 現在のホームルームは楽しいですか



図A ホームルームの感じ方とF4・F5・F6の平均

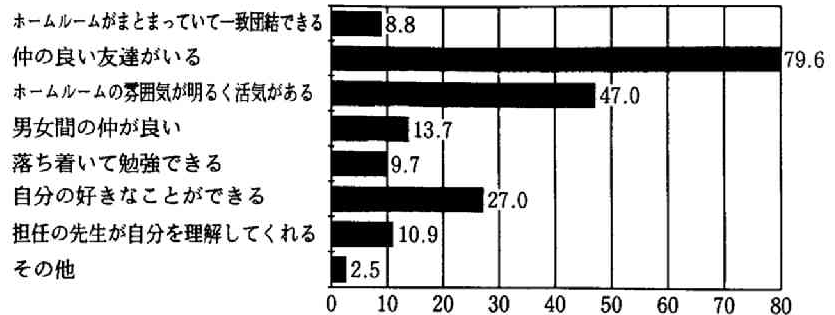


(2) 「(「楽しい」、「まあ楽しい」と回答した生徒に対して) 現在のホームルームが楽しいのはなぜですか」(3つまでの複数回答)(図5)

「仲の良い友達がいる」と回答した生徒が79.6%で一番多い。次に「雰囲気明るく活気が

ある」が47.0%である。それに対して「まとまって一致団結できる」を選んだ生徒は8.8%と少ない。このことから、ホームルームを生徒の個人的な友達関係の集まりから進展させて、集団としてのまとまりをもち、協力して何かを達成するような帰属意識や連帯感を育てる必要がある。

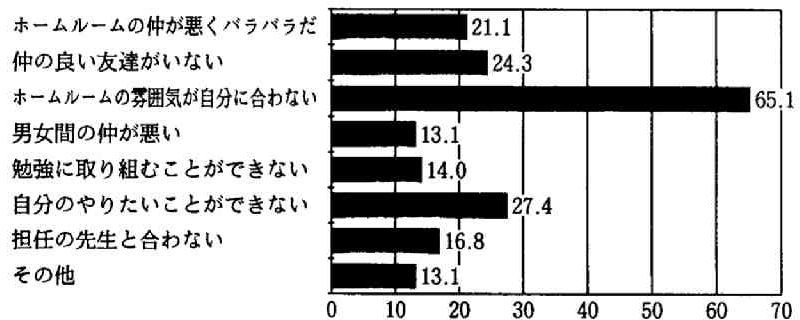
図5 現在のホームルームが楽しい理由



(3) 「(「あまり楽しくない」、「全く楽しくない」と回答した生徒に対して) 現在のホームルームが楽しくないのはなぜですか」(3つまでの複数回答)(図6)

「ホームルームの雰囲気が自分に合わない」と回答した生徒が65.1%と一番多い。次に「自分のやりたいことができない」(27.4%)、「仲の良い友達がいらない」(24.3%)の順である。このことは、生徒が自分の気持ちや考えを表現する機会が少なく、人間的な触れ合いをもちにくいからではないか。生徒同士がお互いを理解し合い、認め合うような機会を多くもたせることが必要である。

図6 現在のホームルームが楽しくない理由

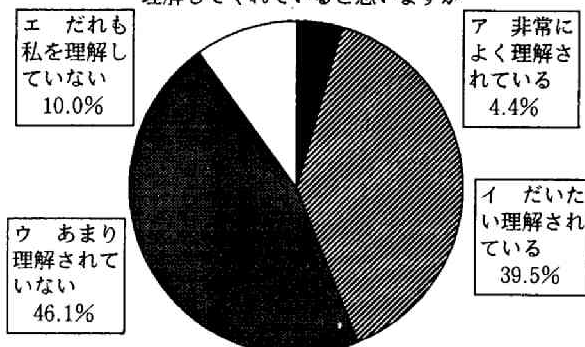


(4) 「ホームルームの友達はあなたのことを理解してくれていると思いますか」(図7)(図B)

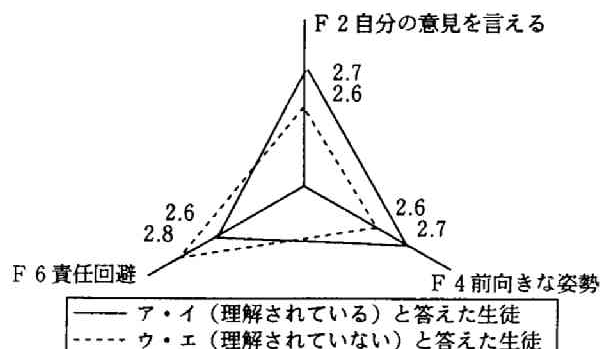
「ウ あまり理解されていない」、「エ だれも私を理解していない」と回答した生徒は合わせると56.1%である。

図Bから、友達から理解されていないと感じている生徒は、理解されていると感じている生徒と比較して、人の前で自分の意見を言うことができず、自分で打ち込んでいるものがなく、責任ある立場を避けようとする傾向がある。このことから、消極的で、自分を表現することが得意ではない生徒の姿が伺われる。

図7 ホームルームの友達はあなたのことを理解してくれていると思いますか



図B 友達から理解されているかとF2・F4・F6の平均

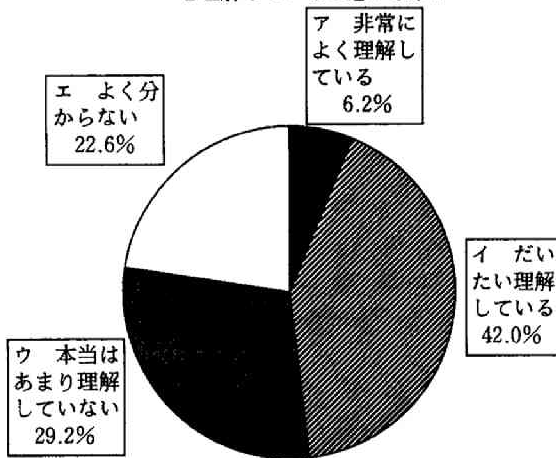


(5) 「あなたはホームルームの友達を理解していると思いますか」(図8)(図C)

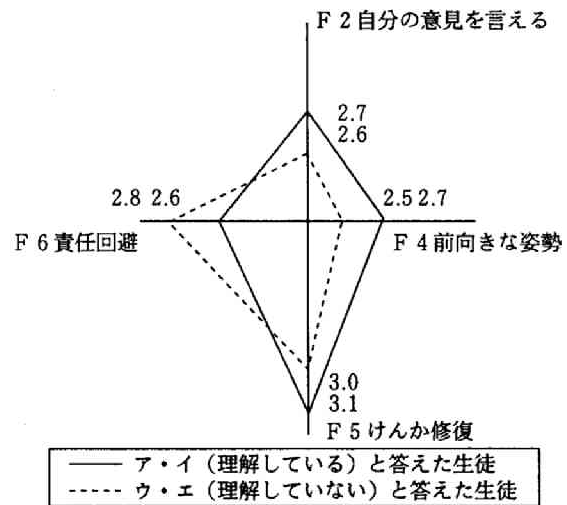
友達のことを「ウ 本当はあまり理解していない」という生徒は29.2%、「エ よく分からない」生徒が22.6%いる。合わせると51.8%の生徒が、自分の友達のことをあまりよく理解していないと考えている。

図Cから、友達を理解していないと思う生徒は、友達を理解していると思う生徒と比較して、人の前で自分の意見を言うことができず、自分で打ち込んでいるものがなく、友達とけんかすると人間関係を修復できず、責任ある立場を避けようとする傾向がある。3-(4)と同様に消極的な生徒の姿が伺われる。

図8 あなたはホームルームの友達を理解していると思いますか



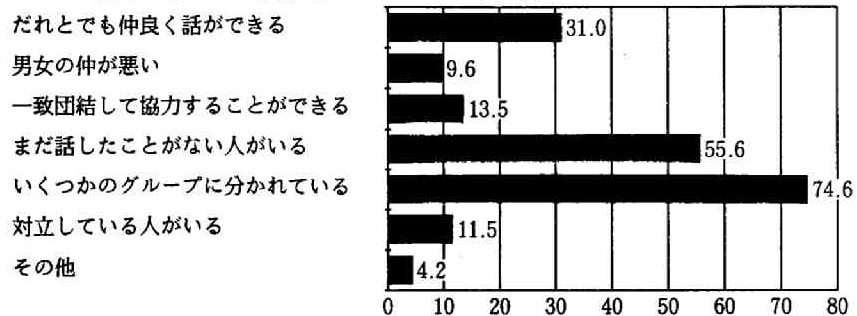
図C 友達を理解しているかとF2・F4・F5・F6の平均



(6) 「あなたから見て、あなたのホームルームの人間関係はどのようなものですか」(3つまでの複数回答)(図9)

ホームルームが「いくつかのグループに分かれている」と考えている生徒が74.6%、「まだ話したことがない人がある」生徒が55.6%いる。このことから生徒は自分の属しているグループの中に閉じこもって、全体に対して自己表現ができないでいる様子が伺われる。ホームルームが生徒の学校生活の中で一番長く生活する場であることを考えると、生徒が安心して自分を表現し、お互いを理解し合える集団にしていく必要がある。

図9 あなたから見て、ホームルームの人間関係はどのようなものですか

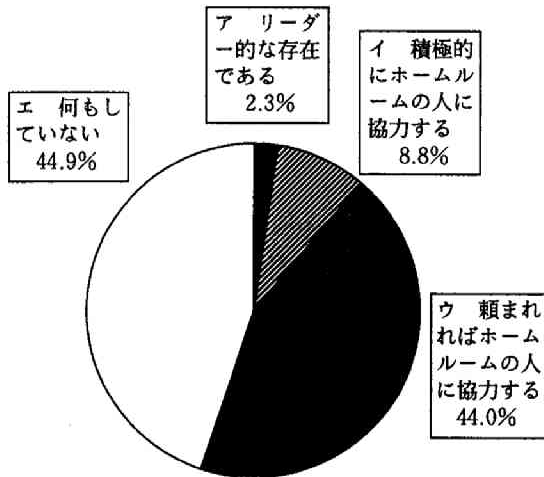


(7) 「ホームルームの中でのあなたの役割は何ですか」(図10)(図D)

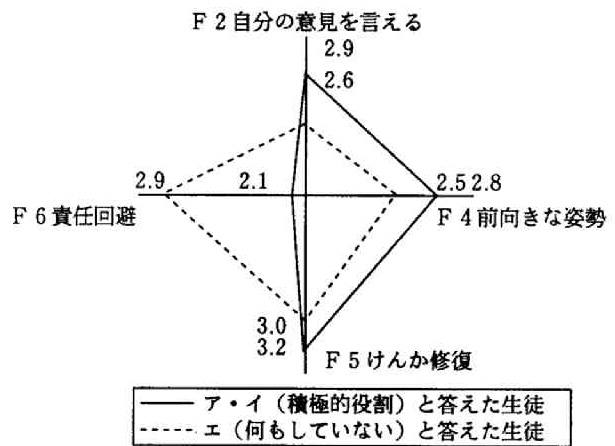
「ア リーダー的存在である」、「イ 積極的にホームルームの人に協力する」、「ウ 頼まれればホームルームの人に協力する」と回答した生徒を合わせると、55.1%の生徒が何らかの役割をホームルームで果たしている。しかし「ウ 頼まれればホームルームの人に協力する」が44.0%と一番多く、自分から進んで役割を果たそうという姿勢に乏しいことが分かる。その一方で「エ 何もしていない」と回答した生徒が半数近い44.9%いる。教師や他の生徒から、認められることで、生徒一人一人に集団の一員としての自覚をもたせ、自分を生かそうとする意識を高めさせていくことが重要である。

図Dから、「ア リーダー的な存在」の生徒と「イ 積極的にホームルームの人に協力する」生徒は、「エ 何もしていない」生徒と比較して、人の前で自分の意見を言うことができ、自分で打ち込んでいるものがあり、友達とけんかしても仲良くでき、責任ある立場を避けようとなし傾向がある。このことから前向きな自己表現のできる生徒の姿が伺われる。

図10 ホームルームの中でのあなたの役割は何ですか



図D ホームルームの中での役割とF 2・F 4・F 5・F 6の平均



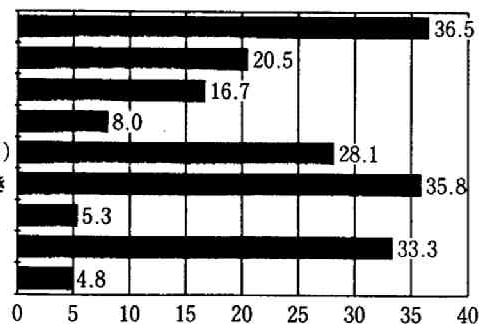
(8) 「あなたにとってロングホームルームの時間が最も有意義に使われていると思うのはどんなときですか」(3つまでの複数回答)(図11)

「学校行事について話し合っているとき」と回答した生徒が36.5%と一番多い。次に「ホームルームの係や席替えなどについて話し合っているとき」(35.8%)である。生徒はロングホームルームでは学校行事や、自分自身の身近な問題を解決するための話し合いに意義を見いだし

ている。その一方で、「ロングホームルームの時間はあまり意味がない」と回答した生徒が、33.3%いる。生徒が興味・関心をもてる話題から話し合いを行い、他の人がどのような意見や考えをもっているかを知るとともに、自分の意見や考えを言うことによって、生徒の相互理解を深めさせていくことが大切である。

図11 ロングホームルームの時間が最も有意義に使われていると思うのはどんなときですか

学校行事について話し合っているとき
進路について話したり学習しているとき
担任からの連絡や注意
何かテーマを決めてお互いの意見を発表しているとき
レクリエーション(スポーツ・映画・ゲーム等)
ホームルームの係や席替え等について話し合うとき
集会(学年会や講演会等)
ロングホームルームの時間はあまり意味がない
その他



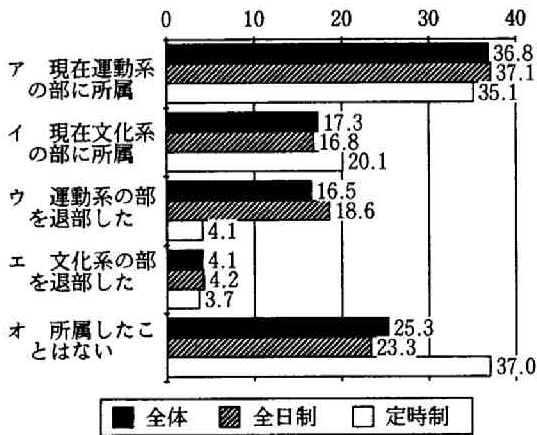
4 部活動について

(1)「あなたは入学後、何らかの部に所属したことがありますか」(図12)(図E)

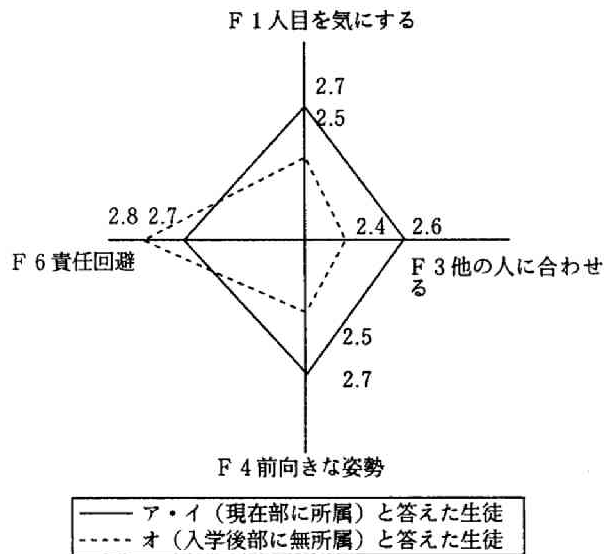
現在、54.1%の生徒が部活動を行っている。入学後一度何らかの部に入部した生徒は全日制で76.7%、定時制で63.0%である。そのうち退部した生徒は全日制で29.7%、定時制で12.4%で、中途の退部は全日制の方が多い。一方、最初から入部しない生徒は、全日制的23.3%に対して定時制は37.0%となり、定時制の方が入部しない割合が高い。このことから、生徒が部活動に積極的に参加するような働きかけや部活動を継続していきけるような指導が必要である。

図Eから、現在部に所属している生徒は、入学後部活動に所属したことがない生徒に比較して、人から自分のことを認めてもらいたいと考えており、協調性があり、前向きな姿勢で責任感が強い傾向にある。このことから、ものごとに対して積極的に取り組んで行こうとする生徒の姿が伺われる。

図12 あなたは、入学後何らかの部に所属したことがありますか



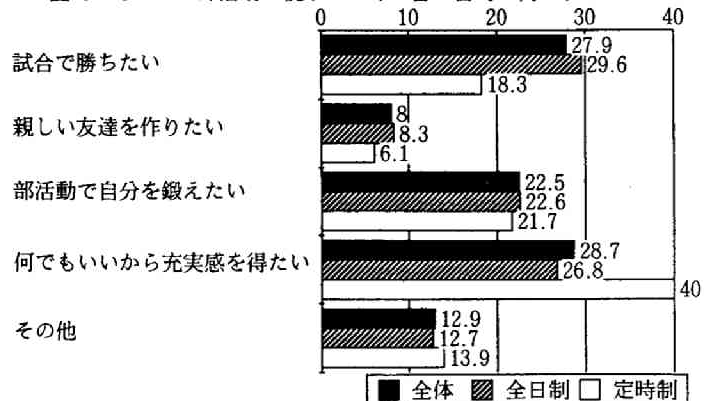
図E 部活動への所属とF1・F3・F4・F6の平均



(2)「あなたが部活動を続けていく一番の目的は何ですか」(図13)

「何でもいいから充実感を得たい」と回答した生徒が28.7%で一番多い。次に「試合で勝ちたい(コンクール・発表会で成功したい)」(27.9%)である。特に、定時制の40.0%の生徒が部活動に充実感を求めている。このことから、生徒が部活動を通して良かったと感じるような指導が必要である。

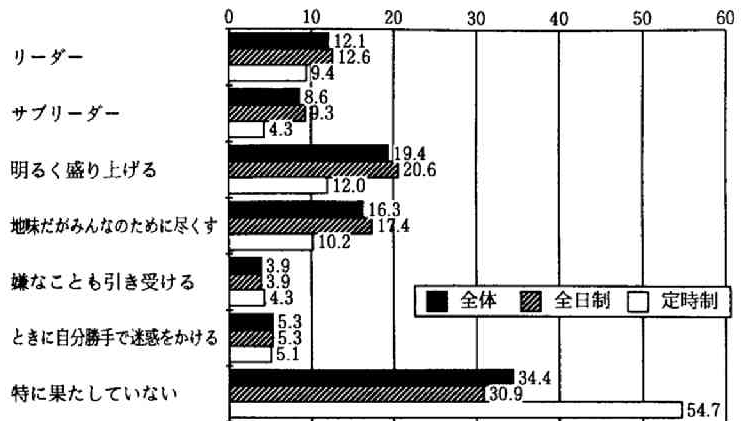
図13 あなたが部活動を続けていく一番の目的は何ですか



(3)「あなたが部活動で果している役割は何ですか」(図14)

自分が部活動で「何らかの役割を果たしている」と考えている生徒は60.3%いる。それに対して「ときに自分勝手に迷惑をかける」、「特に果たしていない」と回答した生徒が39.7%いる。このことから、部に所属している場合は、リーダーシップの意識をもっていたり、また集団の中で目立たなくても自分の役割を認識している生徒が多いことが分かる。集団の中で積極的に役割を果たすことのできる人間の育成に、部活動の果たしている役割は大きい。「特に果たしていない」と回答した生徒には、役割を自覚していない生徒もいると考えられる。これらの生徒には、自分の役割を発見させたり、気付かせたりする指導が必要である。

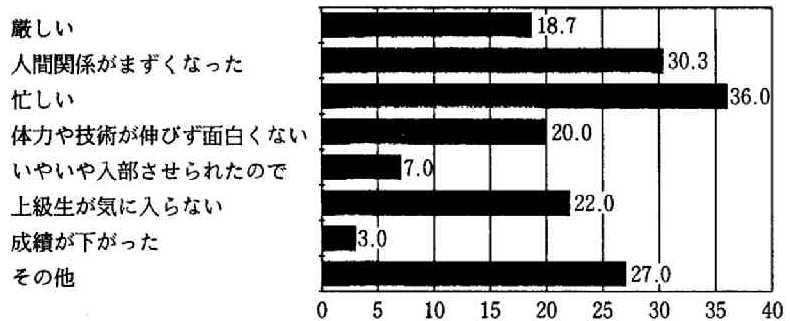
図14 あなたが部活動で果たしている役割は何ですか



(4)「あなたが部を辞めた理由は何ですか」(3つまでの複数回答)(図15)

「忙しい」と答えた生徒が36.0%と一番多い。学校外での生徒の活動の場が増え、部活動で時間を拘束されるのを敬遠する様子が伺われる。また「人間関係がまずくなった」(30.3%)や、「上級生が気に入らない」(22.0%)を挙げた生徒も多い。人間関係が退部の大きな原因になっている。また、「その他」(27.0%)の回答の理由として「つまらない」、「面倒くさい」を挙げた生徒が多い。

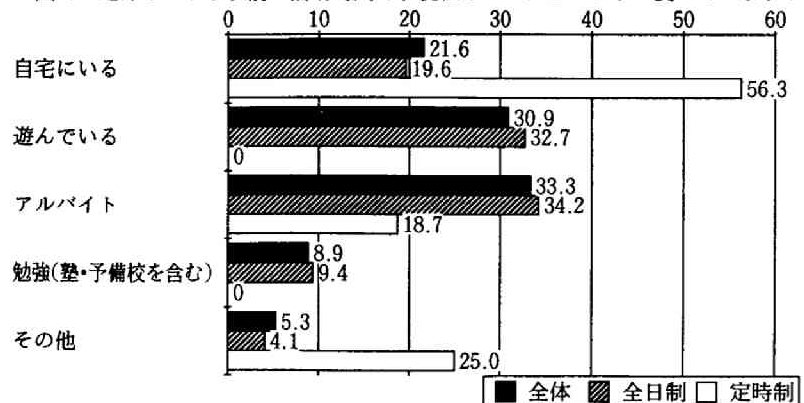
図15 あなたが部を辞めた理由は何ですか



(5)「(退部した生徒に対して)以前の活動時間を現在のあなたはどのように使っていますか」(図16)

「アルバイト」と回答した生徒が33.3%、「遊んでいる」と回答した生徒が30.9%であった。生徒は部を辞めてできた時間を家庭や学校外での自由時間として使っている。

図16 退部してから以前の活動時間を、現在あなたはどのように使っていますか



Ⅲ 調査結果に基づいた考察と提言

－相互理解を深め、自己を生かすホームルーム活動と部活動－

アンケート結果によれば、65.7%の生徒が「現在のホームルームを楽しんでいる」と答えている。この理由として、79.6%の生徒が「仲の良い友達がいる」からと回答している（アンケート項目3-(1)、3-(2)）。その一方で、半数以上の生徒が「自分は友達に理解してもらっていない」また「自分も友達のことを理解していない」と回答している（アンケート項目3-(4)、3-(5)）。そのことから、生徒の友人関係の多くが表面的な付き合いにとどまっていることが伺われる。その理由は、生徒と生徒が本音で話し合ったり、心と心を触れ合ったりする機会が少ないことが挙げられる。そこで、ホームルームや部といった集団の中で、生徒が表面的な仲の良い集団から一歩進んで、お互いを真に理解し合っていけるような集団にすることが必要であると考えた。

「真に相手を理解しよう」、「自分を理解してもらおう」と相互理解を図っていこうと努力することは、自分を見つめ直すよい機会でもあり、自己発見や自己理解につながっていくと考えられる。この点から、自己理解と相互理解とは不可分な関係にあると言える。学校生活に対して肯定的に感じている生徒と否定的に感じている生徒では、人間関係の捉え方に違いがあることが分かった（図Aから図Eのグラフ）。その違いは、生徒の人間関係についての意識が、その集団の中で自分が他の人から認められているという自信と集団内の信頼関係の強さに大きく左右されていることである。このことから、生徒が肯定的かつ積極的な自己理解を進めることによって自己の発見や自己変革を行い、また、相互理解を図ることによってお互いに人格的に影響し合い、人間的に高め合っていけるような集団にすることが大切であると考えた。

さらに、生徒が集団の中で役割や責任を自覚し、それを果たしていくことは、集団への帰属意識を高め、より一層の相互理解を深めていくことになる。このために、教師は、集団の中で生徒一人一人に活躍の場や役割をもたせるとともに、「彼（彼女）が頑張っているんだから自分も頑張ろう」というような、他の生徒に良い影響を及ぼし、ひいては、主体的に自分を伸ばしていこうとする態度を育てていくことが必要であると考えた。また、教師は、生徒が集団の中でどのような役割や責任を果たし、自分を生かしているかについて常に目を配ることも大切であると考えた。そして生徒が達成した成果を積極的に評価するとともに、達成した成果を他の生徒に気付かせて、生徒と生徒の中で評価させることも大切である。つまり、「自分が集団の中で必要とされている」あるいは「自分が生かされている」ことを実感させることが重要であると考えた。

以上の観点から以下の三点の提言をまとめた。

- | |
|---|
| <p>1 集団の中で自ら進んで望ましい人間関係を作り、生きがいを見いだすことのできるように、様々な働きかけを工夫する。</p> |
|---|

高校を選んだ理由として「新しい人間関係を作りたい」と答えた生徒が16.7%であった（アンケート項目2-(1)）。また、部活動を続けていく理由として「何でもいいから充実感を得たい」と答えた生徒が28.7%であった（アンケート項目4-(2)）。生徒は、新しい友達との出会いや何かに一生懸命に集中したいという欲求をもっている。しかし、多くの生徒は、それらの

欲求をもちながらも、どうやって人間関係を作ったらよいか、あるいは、何に打ち込んだらよいか分からないでいる様子が伺われる。このことから、教師は、生徒が進んで新しい人間関係を求めたり、集団内での充実感を得ることができるきっかけをつくる様々な工夫をする必要がある。例えば、入学当初であれば、ホームルーム活動では、自己紹介を工夫してできるだけ多くの生徒を知るようなロングホームルームを計画したり、部活動では、部活動紹介等を工夫して、生徒が様々な部活動を知り、興味・関心をもつことによって、部活動への加入を勧める等が考えられる。

2 集団の中の心と心の触れ合いを大切にし、他の人の価値観や考え方を理解しようとする態度をはぐくむ工夫をする。

生徒が、自分自身の考えや価値観をしっかりもち、また、他の人の考えや価値観を理解しようとするのが、生徒と生徒の相互理解の第一歩となるのではないかと。生徒は他の人にどのように思われているかを気にする傾向がある（F1）。このため、生徒自身の率直な意見や考えをお互いに言うことができる機会をもつことによって、生徒と生徒が率直に自己表現できる人間関係を作りあげていくことが大切である。そして、教師と生徒、生徒と生徒の間に心の通い合いをもてるのが重要である。自分の率直な自己表現の場として、例えば、ホームルーム活動では、ロングホームルームの時間に生徒の興味のある話題を選び、自由に発言できるように小グループでの話し合いを行ったり、日誌を活用してその日の出来事について必ず自分の考えを記入させたりするなどの方法が考えられる。部活動では、ミーティングで活動の反省を全員で行い、生徒一人一人の成長につながるような意見交換を行うなどが考えられる。これらのことにより、自分を客観的に捉えることによって自己理解を深めるとともに、他の人の様々な考えや価値観を知り、その良いところを認めることで、自分を伸ばしていけるようにすることが重要である。その際、画一的な考え方しか認めない態度や排他的な態度は、お互いを伸ばしていないことを生徒に理解させる必要がある。

3 生徒が集団の中で役割を担い、責任を自覚するように工夫する。そして、成果をあげたことについて積極的な評価をする。

「ホームルームで、特に役割を何もしていない」生徒は44.9%、(3-(7))、「部活動で、役割を特に果たしていない」生徒は34.4%(4-(3))であった。なぜ、生徒は集団の中で自分の役割を自覚しないのだろうか。その理由は、生徒が自分の能力や適性をきちんと把握していないために、集団の中で自分が何をできるのかが分からず、役割を果たすことによって、自分を生かしていくことができなためであると考えられる。そこで、皆で集団の具体的な目標を決めて、その実現に向かって努力をするとともに、生徒一人一人が集団の中で自分の役割をもつことを通して、集団に対する帰属意識や連帯感を育てていく必要がある。そして、目標に対して結果がどうであったかを反省し、その中で生徒の果たした役割については、教師はもちろん、他の生徒からも積極的に評価をしていき、生徒一人一人が自分を生かすことができるように工夫することが重要である。

IV 実践事例

1 ホームルーム活動1 -生徒と教師が心を通わす学級経営-

(1) ねらい

本校の最近の傾向として、髪は長く茶色でまだら、両方の耳はピアスにヘッドホン、ズボンはずり落ち地面を引きずる、スカート丈は極端に短くソックスはダボダボ、授業中の私語や飲み食いは当然のよう、でも悪気は全くなく、その場の感情に流されやすい生徒が多くなっている。本当は、明るい性格で人懐っこく学校が大好きで、新しい人間関係を作りたいと思っている。

このような生徒と何でも気軽に言い合える関係になりたいと思った。生徒の個性や価値観は時代で異なるが、どんな時代であっても生徒は必ず人とは違う良さや素晴らしさがある。それらを認め、学校生活を通じてより良い人間関係を築いていけるようにすることが必要である。また、主体的に決定する能力を養い、一生に何度となく選択と決断を迫られる局面で、悔いを残さない人生を歩んで行けるようにすることが大切である。そのためには、教師は生徒と本音で触れ合うことが重要である。

このような関係は、生徒と教師の日々の心の通い合いと、教師の地道な努力の積み重ねによると考えられる。そこで、教師が生徒と意思の疎通を図るきっかけとして、面談方法や学級日誌を工夫した。一方、生徒と教師が学校生活に関する情報を交換し共有するために、学級通信や学年通信などを発行した。

(2) 対象

1年次 43名、2年次 39名、3年次 37名（卒業生数 256名）

毎年、ホームルーム編成替えをおこなった。

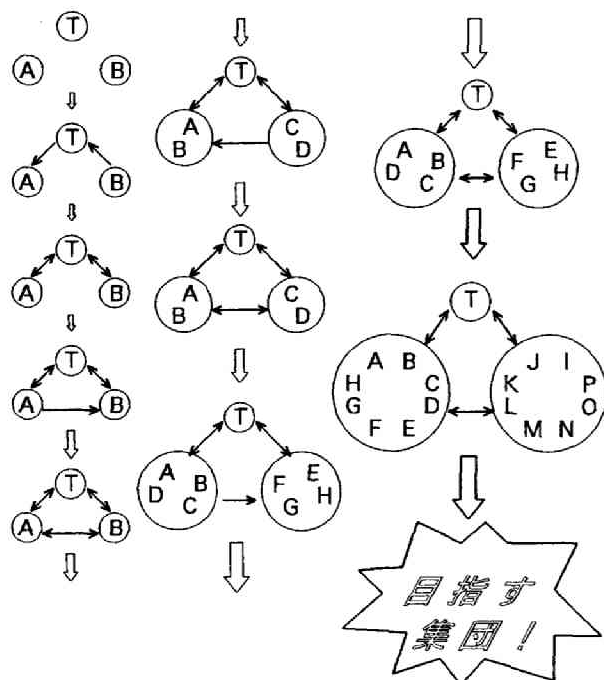
(3) 考え方

教師Tが生徒Aに接する（図中→）または生徒BがTに接すると、TとAまたはTとBの間で相互関係（図中↔）が成立する。するとAは間接的にTを介してBに接するきっかけが生じ、AとBの間で関係が成立する。そして、AとTとBにおける三者の相互関係ができあがる。

同様にしてできたCとDがTを介してAとBに接し、A・BとTとC・Dの関係へ発展する。このような過程を繰り返すことで、徐々に集団は成長し、より良い人間関係が成り立つ「目指す集団へと発展する」と考えた。

図1は、上記の変化の意識過程を模式的に表したものである。

図1 一人一人の人間関係が徐々に成長し、目指す集団へと変化する意識過程の模式図



(4) 方策 - 生徒と教師との心の通い合いを目指して -

① 面談 (表1参照)

人権上の理由で、個人面談にしたこともあったが「気の合う仲間と一緒にいれば、一人ではなかなか話せない生徒が様々な話をしてくれる」と考え、集団面談を行った。時には、他のホームルームの生徒も参加して、面談をしたこともあった。気楽に話ができる場所で、生徒が言いたいことを話しているときは、担任は黙って耳を傾けるようにした。さらに、担任の高校時代の思い出や失敗談などを話すことで、担任がどのような人間なのかを知ってもらうように配慮した。

第3学年時の個人面談で、「心の優しさと自由の厳しさを教えてくれた先生を誇りに思っています」(男子)や「先生は、物わかりのいい、年上のお兄さんという感じでした。先生の考え方や生き方に驚きを感じた時もありましたが、私達と同じ気持ちになって考えてくれた先生に感謝しています」(女子)といった生徒の声を直接聞き、多少なりとも生徒の心と担任の心が通い合ったように思った。

② 学級日誌 (表1参照)

「生徒と教師との心の通い合いが日々積み重ねられることで、やがて生徒はホームルーム全体へ目を向けるようになる」と考え、学級日誌を有効的に活用した。

その日の日直が学校生活を記すとともに、余白には他の生徒が目を通したくなるような記述を期待した。第1学年当初、意図通りの記述は少なかったが、担任は諦めないで生徒一人一人に対して真しに本音で返答を続けた。やがて、面談の効果もあり、徐々に記される量が増えてきた。中には、授業中にもかかわらずそっと何人かで書き合う生徒や、家に持ち帰って書いてくる生徒が現れた。5月頃には2~3頁に渡って記されたこともあった。「私達の方をいつも向いていた先生、ささいなクラスの問題もこの日誌が解決していたのですね。私達はこの日誌が大好きで、『また2年生でも書きたいネ!』といつもみんなで話しているんですよ」という1年女子の記述があった。移動教室や修学旅行へは生徒自らが持参し、宿泊先で記入して担任に返答を書かせるまでになった。担任が興味をもって喜んで日誌を読み、返答を書くことが大切であり、そのことが生徒の励みになってホームルームへ浸透してきたと感じた。

表1 心の通い合いを目指す

学年	第1学年			第2学年			第3学年		
	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
主な行事 各種方策	中体校保 同育外護 考祭学 主 百会	潮道保 風路理 祭就者 明全	香っ 学丁 教ソ 式室	保道体 境路育 身就祭 会明	潮保修 風護学 祭者執 会行	フ学 年丁 ソ来 式考	保大比 視学職 者就祝 会明	進潮保 生風護 生風護 者就祝 明全	始予 卒業 式会 式会
① 面談	★集団面談は放課後、2~5名を対象に教科準備室で週2~4回実施した。 面談で記録は一切取らず、内容は秘密にする約束をした。1回の時間は約1時間、主に世間話をした。			★第1学年時と基本的に同様の方法で実施した。 世間話だけでなく、生徒の将来の夢や今困っていることなどについて話させ、徐々に進路を意識させた内容をおり混ぜながら行った。			★個人面談あるいは保護者を含む三者面談は、主に空時間や放課後教科準備室で週3~4回実施した。 生徒が提出した進路資料を参考に、面談中の必要事項は必ず記録し、秘密厳守で1時間以内を原則とした。同じ生徒と何度も面談を行ったことは言うまでもない。		
② 学級日誌	★日誌は、生活記録と余白で構成されている。朝のSHRで日直に渡し、放課後担任は日直から直接受け取った。 毎日、担任は点検のため目を通し、返答を記入した。 日誌記入が習慣化するまで約1ヶ月必要であった。			★第1学年時と基本的に同様の方法で行った。 なお、日誌記入が習慣化するまで3週間程度必要であった。			★第1、2学年時と同様に行った。なお、日誌記入は年度当初から習慣化されていた。		
③ 学級通信	○○○ ○ ○ ○ ○ ○ ★学校行事に即して、7冊頒布した。生徒個人の活躍等を中心に掲載し、学校長の他一部教員にも配布した。			○○○○ ○○○○ ○○○○ ★第1学年時と基本的に同様の方法で、加増頒布した。生徒の声をまとめ、それを原稿にして発行したりもした。					
④ 学年通信 学年通信集							★行事に即し、主に進路に関係した内容で35冊頒布、毎週末発行した。 学級通信を発願させた形態で、生徒や教師が直接参加するように努めた。全教職員へ配布した。 ★35冊の学年通信を有志生徒と冊子化、全卒業生の記念品にした。		
⑤ 学級文集							★学級独自の活動を行った。 自分の母親に宛て短文で手紙を綴り、順不同で掲載し小冊子にした。代表生徒と担任で作り、学級だけの貴重な卒業記念品にした。		

③ 学級通信（表1参照）

「情報を交換し共有することの大切さと教師の願いを託したい」と考え、学級通信を発行した。教師は作成する際、生徒の批判や中傷を避け、生徒一人一人が仮名で登場するようにした。さらに、個人の活躍・協力・努力といった生徒の良さを強調し、必ずほめるように努めた。第1学年の年度末、一年間の反省アンケートに「不安で一杯だった高校生活がスムーズにスタートできたことにとっても感謝しています。2年でも頑張れるような気がします」と言う男子の記述から、情報を共有することが生徒の不安解消に役立っていることが分かった。そこで、第2学年時では通信の発行数を増やし、逆に記述量は精選して1回の内容を短くした。生徒が将来役に立つ話題や今知っておくべき内容を選んで作成した。題材を集めるため、ショートホームルームで生徒に話を聞いたり、学校行事が終わった後などに感想を書かせたりし、それを集約して発行したりもした。

文化祭の片付けをしている時に「文化祭のかき氷、男子があれば協力してくれるとは思いませんでした。全員が一致団結して『ヤッター！』って感じました」という2年女子の声から、ホームルーム全体に教師の願いは情報を通して伝わったことが分かった。

(5) まとめ

第3学年時では、学年の他の担任の方々からの強い希望もあり、学級通信から学年通信（表1の④）を発行することになった。第3学年は高校生活の集大成であり、生徒はどうしても進路を意識する。そこで、学年通信が生徒全員の意思疎通を図るきっかけとなり、進路決定への援助活動となれば意義深くなると考えた。さらに、ホームルームの生徒が学年全体に目を向けられるようになることも大切であると考えた。そのような理由から、記述内容は多く、発行数も一層増え、作成は非常に労力を要した。卒業式近くに、1年間の歩みを「軌跡」という題で有志生徒と冊子化した。その時、「形で残る思い出ですね」という生徒の声から、学年全体がまとまるためのきっかけとなったと確信できた。

さらに、家族や周囲の人へ感謝の気持ちを伝えることをねらいに、ホームルーム独自の活動として、学級文集（表1の⑤）を作成した。この活動は「生徒の心の中にある本音を引き出し、卒業するという成就感へつながっていく」と考えた。2学期の終業式の日になげかけ、冬休みの課題とした。生徒は興味をもち、全員が3学期の始業式に原稿を提出した。このことから、生徒と担任の意思が一致しただけでなく、生徒が素直に本音を表現できるようになったと実感した。完成した小冊子は、卒業式当日に生徒一人へ2冊配布し、1冊は本人から保護者へ直接手渡した。

本校の生徒も多感な青年前期の人間であることに変わりはない。また、生徒一人一人は自分に良さがありながらそれに気付かずに成長し、現在があるだけなのである。人がやる気を起こし、生き活きと生きるためには、教師や大人が、生徒の良さや素晴らしさを認め、励ますことが最も大切なことである。そして、何よりも教師がどんな生徒であっても人間として愛していく心が根底になくは、学級経営や学年経営は絵に描いた餅に等しいものだと思う。

この報告書に述べたことは、実は結果論に過ぎない。意図的・計画的に行うべきである教育活動とはいえ「やりながら考え、やりながら実行した」というのが本音である。今後は、この実践を踏み台にして、次の学級経営は少しでも計画的でありたいと考えている。

2 ホームルーム活動2 -相互理解を深める指導の工夫-

(1) ねらい

調査結果によると、回答者のうち全体の3分の1にあたる生徒が「ホームルーム活動に意義を感じていない」と答えている。さらに、多くの回答者が「ホームルーム内で自分が理解されていない」と感じている。

対象としたホームルームは、友人関係がはぐくまれつつある「仲の良い」集団である。しかし、ホームルーム集団としての学校行事等への取り組みは、積極的な生徒がいる反面、消極的であり参加しない生徒も見受けられる。このため、担任が積極的な生徒と話をしているとき「自分たちは個人の予定を変更してまでも活動しているのに、自分勝手に行動している生徒がいるのは許せない」という発言が飛び出すこともあった。この原因は、多くの生徒が相互理解を図り、集団内の役割を分担し、さらにはお互いが助け合ってものごとを完成させたり、成功させていくことを苦手としているためであると考えられる。

そこで、教師はホームルーム指導に当たって、まず第一に「生徒一人一人の自己理解を深めさせ、それを基に、教師と生徒、生徒と生徒との理解を深めさせること」、第二に、「生徒が各々の役割を自覚して、お互いに助け合いながら問題を解決していくこと」が必要であると考えた。

本事例では、教師が生徒の活動を支援することによって、生徒の学校行事等への取り組みを積極化させるとともに、生徒にとってホームルーム活動を意義あるものとし、さらには生徒一人一人に集団の一員としての自覚をもたせるための実践を行った。

(2) 対象 1年生 42名(男子22名 女子20名)

(3) 経過及び取り組み

生徒たちが一つの集団として結束を強めていくようにするとともに、生徒全員が役割を分担できるようにするために、文化祭企画委員が中心となり、ホームルーム内での話し合いを重ね、文化祭企画としてビデオ劇を作成した。

① 文化祭企画・原作の決定

4月	LHR：各委員の決定、文化祭企画委員6名を選任 LHR：文化祭の記録ビデオを生徒に見せる
5月中旬	LHR：文化祭企画について班毎話し合いを実施 企画会議：班での話し合いの結果を参考に文化祭企画会議を実施 下旬 LHR：文化祭企画(ビデオ劇の作成)を決定、企画書の提出
6月初旬	企画会議：ビデオ劇の原作の選定作業 下旬 LHR：ビデオ劇の原作の決定 LHR：脚本の作成者を募集
	夏休み中：脚本作成係と企画委員による脚本づくり 企画会議：脚本の確認と役割分担案の作成
9月上旬	LHR：脚本を生徒に配布、出演者・役割分担を決定 企画会議：撮影スケジュールを立案・撮影開始 LHR：文化祭当日の役割分担の確認 18・19：編集係：編集・音入れ作業 21・22：文化祭当日
10月中旬	LHR：文化祭についての感想文と反省会

4月からは、文化祭についての紹介、委員の選出、文化祭企画の決定が主な内容となった。生徒の中には、中学校時代に文化祭を体験していない生徒が多かった。このため、担任は、生徒に学校で作成した文化祭の記録ビデオを見せるとともに、各班に文化祭の企画を紹介した本や雑誌を配布・閲覧させ、高校の文化祭についての意識を高めさせた。そして、ホームルームで行う企画について考えさせるきっかけを作った。

文化祭企画の運営の中心は、4月

当初のロングホームルームで生徒本人の立候補により選任した2名のホームルーム委員と6名の文化祭企画委員（以下、企画委員）であった。

ホームルーム企画を決定するに当たっては、まず5～6名を単位とした班で文化祭企画について話し合いを行わせた。その際、担任は(ア)全員に役割分担ができるもの、(イ)学校から配布される予算内で収まるもの、(ウ)ホームルーム全体で楽しめるものの3点を考えながら話し合いをするように指導した。

各班での話し合いの結果を基に、企画委員は2回の企画会議で企画の検討を重ねて、三つの原案に絞り込んだ。そして、企画委員がロングホームルームでそれらの原案についての説明をしてから、生徒全員で話し合いを行った。最終的には、生徒が投票を行って、文化祭企画を「ビデオ劇」の作成に決定した。

② 原作の決定と脚本の作成

6月からは、ビデオ劇の原作、ストーリー、脚本の決定が中心的な内容となった。企画会議で「原作はオリジナルなものにする」方針を決めた。

次に、企画委員は他の生徒からも色々なストーリーのアイデアを出してもらうために、ショートホームルームで「ストーリー原案を募集している」ことを伝えた。そして、企画会議で、企画委員が考えてきたり、他の生徒からのアイデアを基にストーリーを協議し、いくつかの原案に絞り込んだ。他の生徒にそれらの原案をロングホームルームで提示して、ストーリーを決定した。

脚本の作成に当たっては、企画委員が脚本作成係を募集した。しかし、立候補者が現れなかったため、文芸部に所属している生徒に脚本の作成を依頼することとなった。

企画委員と脚本作成係の生徒とが夏休みの期間を利用して脚本についての話し合いを行って作成した。そして、脚本が完成した段階で企画会議を行い、出演者や役割分担についての話し合いを行った。

③ 役割分担の決定と撮影・編集作業

9月からは、出演者を含む役割分担の決定と撮影及び編集作業が主な内容となった。役割分担は、企画委員やホームルーム委員が生徒全員に役割を当てられるように衣装係・小道具係・化粧係・撮影係・編集録音係等の多くの役割を考えた。その際、企画委員から「役割が決まらなくて、無理やり押しつけるのではなく、あくまでも希望により役割分担を決めていきたい」という意見が出された。このため、生徒に希望を募るとともに、希望の少なそうな役割については、教師や企画委員が引き受けてくれそうな生徒に事前に交渉を行った。そして、ロングホームルームの時間に全役割分担を決定した。

撮影作業は、出演者の決定後ただちに開始されたが、出演者の台詞覚えの悪さや撮影機材の不足から予定通り進まなかった。しかし、生徒全員が様々な工夫や協力をして問題解決に当たった。たとえば、台詞に関しては、小道具係の生徒が台詞を大きく書いた紙を板に張って出演者に見せたり、脚本係の生徒が出演者の覚えやすい台詞に変えたりした。最終的に、編集及び音入れ等を行って「ビデオ劇」が完成したのは文化祭の当日であった。作成にあたり様々な苦労や失敗をしたが、生徒全員が協力して作品を仕上げたことに、生徒は素直に感動していた。

(4) 生徒の感想

男子A：正直に言って、ビデオ劇など自分のホームルームではできないと思った。だから、初めはやる気がなかった。でも衣装係が遅くまで衣装を作ってくれたり小道具係が小道具を真剣に作ってくれているのを見て、自分も真剣にやろうと思ひ、頑張るようになった。自分のスクリーンに写った姿を見た時は恥ずかしかった。でもビデオが完成してよかった。

女子A：劇に賛成した時、何か他人ごとのように感じた。衣装を着たり、化粧をしてもらったりして、自分の姿が変わっていくのが、とても不思議な感じがした。ビデオが完成した時には、みんなが協力することでできたのだと思った。そして、今まで話したことがない人とも話をするできるようになった。

男子B：ビデオが完成して良かった。でも、担任の力を借りずに完成させたかった。自分たちの力だけでビデオはできたと思う。

女子B：出演者の化粧をすることでその人が変化していく姿や、化粧で姿が変わった人が驚いてくれる様子を見て、自分に自信がついた。

女子Bの感想文は、卒業後の進路として美容師を希望している生徒のものである。この生徒は、なかなかホームルーム集団になじめずにいた。しかし、教師が個人面談で本人が化粧に興味をもっていることを知っていたので、本人がホームルーム集団になじめるきっかけになればと考え、化粧係になるように事前交渉を行った。そして、この生徒が出演者に化粧をしたことで、他の生徒に好評となったことから、本人は自信をつけ、自ら後期のホームルーム委員に立候補し、ホームルーム委員として集団内の中心的な生徒となった。

(5) まとめと考察

ビデオ劇の作成は、出演者以外に様々な役割分担があり、生徒一人一人がこれらの役割を果たしたり、お互いが協力し、助け合うことによって一つの作品が完成するものである。これらの過程を通して、生徒一人一人が成就感や達成感をもつとともに、生徒と生徒の相互理解が図られ、集団への帰属意識や連帯感を高められると考え、ビデオ劇の作成を行った。学年末に「1年間を振り返って」というアンケートを実施した。その中で「思い出に残った行事や出来事は何か？」という質問に対して、移動教室と並んで文化祭を挙げる生徒が多かった。このことは、生徒にある程度の成就感や達成感を与えることができたからだと思われる。また、文化祭後に生徒が書いた作文から、文化祭企画を通して生徒と生徒の相互理解が図られ、生徒一人一人が集団の中での自らの役割を自覚し、個々の生徒がお互いの努力を認め合い、協力し合ってものごとを解決していく能力が育成されたと考える。さらに目的を遂行するために自ら考え、判断し、行動する能力を身に付けることができたのではないかと考える。今後も様々なホームルーム活動を通して、生徒に「ホームルームで必要とされている」あるいは「生かされている」ことを実感させ、ホームルームへの帰属意識や連帯感をもたせるとともにホームルームに対する満足感をもたせる指導を実践していきたい。

3 部活動1 -相互理解を深め、役割の意識を高める指導の工夫-

(1) ねらい

調査結果によると、所属している部を途中で辞めた生徒の多くが、「人間関係がうまくいかない」ことをその原因に挙げている。これは、学年やホームルームの所属を離れて組織されている部活動の集団にとって、「お互いを生かし合い、望ましい人間関係を作る」ことが大きな課題となっていることを意味している。望ましい人間関係を作り上げるためには、生徒一人一人が自己を良く理解することと、教師と生徒、生徒と生徒が相互理解を深めることが必要である。望ましい人間関係が作り上げられるにしたがい、生徒はその集団の中で自分が果たすべき役割を明確にすることができる。そして、その役割を遂行することで、集団の発展に貢献するという生きがいが生まれるとともに、集団の中で自己を生かす方法を見いだすことができる。

そこで本事例では、生徒が自己理解を深め、教師と生徒、生徒と生徒が相互理解を深めることによって望ましい人間関係を築くとともに、生徒が自分の役割の意識を高めて、それを遂行することで望ましい集団を形成することをねらいとしている。

(2) 対象：男子バレーボール部 9名（2年7名、1年2名）

女子バレーボール部 19名（3年1名、2年8名、1年10名）

(3) 方法

① 個人日誌による自己理解の深化

個人日誌は、練習内容、反省及び感想、体調、ポイントチェックなどの欄があり、生徒一人一人が毎回の部活動後に自己の反省を記入し、教師に提出するものである。ポイントチェックの欄（資料1）には、生徒が自己の反省をする観点として大切な5つの項目が挙げられており、これらを5段階で自己評価して得点化（10点満点）するものである。これは、生徒が客観的で的確な自己評価を行い、その日の自己の反省及び感想の焦点が明確になるように工夫したものである。

この個人日誌で、生徒は自己を見つめ、評価することによって、自己理解を深められるようになる。

② 練習日誌による相互理解の深化

練習日誌は、出欠席、練習内容、負傷、ポイントチェック、本日のベストプレイヤー、反省及び感想、監督の言葉などの欄があり、全部員が輪番で毎回の部活動後に1冊の日誌に記入するものである。生徒は部全体についての反省を中心に記入し、後に教師が指導事項を書き入れる。

資料1 個人日誌のポイントチェック欄

ポイントチェック		0	0.5	1	1.5	2	点
		0	0.5	1	1.5	2	
①遅刻をしなかったか							
②大きな声で元気に練習したか							
③目的を考えながら練習したか							
④チームメイトを励ましたか							
⑤準備、後片づけ等を行ったか							

資料2 練習日誌のポイントチェック欄
及び本日のベストプレイヤー欄

ポイントチェック		0	0.5	1	1.5	2	点
		0	0.5	1	1.5	2	
①時間通りに始まったか							
②大きな声で集中していたか							
③効果のある良い練習ができたか							
④協力的な良い雰囲気であったか							
⑤後片づけ等を全員で行ったか							
《本日のベストプレイヤー》		《どのところが良かったか》					※ 必ず1人記入すること (2人は以上いてもよい)

ポイントチェックの欄（資料2）には、練習が充実するために大切である5つの項目が挙げられており、記入者がこれらを5段階で評価して得点化（10点満点）するものである。また、本日のベストプレイヤーの欄（資料2）は、記入者が自らの判断でその日最も良い練習をした生徒を選び、その理由とともに名前を記入するものである。これらの2つの欄は、前者は生徒が的確にチームを評価し、チームの反省点を明確化できるように、後者はチームメイトを積極的に評価できるようにと工夫したものである。

全部員は次回の活動までに必ず練習日誌に目を通し、記入した生徒の評価や意見と教師の指導事項を理解し、練習に生かしていくようにする。これを毎日繰り返すことによって、生徒と生徒が相互理解を深め、また教師と生徒の相互理解も深められるようになる。

③ 相互評価表を利用した自己理解と相互理解の深化

相互評価表は、練習意欲、練習態度、協調性などの9項目について、部員同士が相互に5段階で評価し合うものである（資料3）。この9項目は練習に対する姿勢や努力を中心に構成し、技術の優劣の評価にならないように配慮した。結果は、生徒が自らを評価した自己の評価点と、自分に対するチームメイトの評価の平均点とを、項目ごとに並べて、比較できる形で本人のみに知らせる。

これによって、生徒は他の部員が自分をどのように理解しているのかを知り、自分を見つめ直して自己理解を深めるようになる。また、生徒がチームメイトを評価することと、自分に対するチームメイトの評価を理解することによって、生徒と生徒の相互理解が深められるとともに、集団内での自分の役割を知る手掛かりとなる。

④ ミーティングによる自己の役割の意識

「チームが目的に向かって向上していくためにチーム内に必要な役割は何か」というテーマでミーティングを行い、理想とするチームにおいて必要とされる個人の役割を検討して、提示する。さらに、生徒は前記の相互評価の結果を踏まえて、チーム内で自らが果たすべき役割を考え、自ら決定する。

このことから、生徒は集団内で自分の置かれた立場を自覚し、自己の役割の意識を高めるようになる。さらには、その役割の遂行を通して、集団内での存在感や帰属意識が高まり、次第に自己を生かし集団を向上させる方向に努力できるようになる。

資料3 相互評価表

____年 氏名 _____			
項目	自分	〇〇	△
出席率（休まずに練習に参加しているか）			
練習意欲（積極的に、集中力をもって練習しているか）			
練習態度（目的を考え、工夫しながら練習しているか）			
声（元気の声、指示の声をいつでも大きく出しているか）			
リーダーシップ（前向きな方向へみんなを引っ張っていく努力をしているか）			
協調性（チームメイトを理解し、ムード作りや全体への配慮をしているか）			
練習成果（この3ヶ月間での、技術の上達の度合いはどうか）			
知識（バレーについての知識をどれくらいもっているか、学習しているか）			
準備、片付け（準備、片付け、掃除などをしっかりとやっているか）			

資料4 チーム内に必要な役割
(ミーティングで生徒が挙げたもの)

- ① 目的の方向にチームをまとめる
- ② リーダーを積極的にサポートする
- ③ 練習方法や練習計画を考える
- ④ 技術などを先輩に教える
- ⑤ 練習中の雰囲気やムードを高める
- ⑥ チームメイトの人間関係を良くする
- ⑦ 自分の技術でチームを引っ張る
- ⑧ 練習に専念できる環境を作るマネジメント
- ⑨ 準備や片付けなどをしっかりとやる
- ⑩ 知識や情報を貯え、チームに提供する

(4) 生徒の感想（相互評価の結果と自分の役割についてのミーティングより）

男子A：自分が思っていたよりみんなの評価が少し良かったので安心した。もっと練習態度をしっかりとチームをまとめ、引っ張っていきたい。

男子B：自分ではもっとやっているつもりだが、思ったより評価が低かった。みんなにはそれが伝わっていないと思った。キャプテンやエースをサポートできるように確実性のあるプレーヤーになりたい。

女子C：出席率を高く見てくれていた。このことは自信があったので嬉しかった。自分の技術の向上と、1年に教えていくことでチームに貢献したい。

女子D：声が最低点となっていて、とてもショックだった。今後は声を出すことと、仲良く楽しくできるように人間関係を良くしていく役割をしたい。

(5) 結果と考察

個人日誌及び練習日誌は、初めは漠然とした反省内容が多かった。しかし、ポイントチェックの欄を設けたことにより、生徒の日々の反省が惰性的にならずに焦点の絞られたものになっていった。そして次第にチーム内での自己の立場を意識した反省や、チームの向上を考えた反省が見られるようになり、その記述から生徒が自己理解を深め、教師と生徒、生徒と生徒が相互理解を深めていく様子が伺われた。また、練習日誌の本日のベストプレーヤーの欄は、積極的にチームメイトを評価し、さらにそれを受け入れる姿勢や雰囲気を作るのに大きな効果があった。記入者は技術の優秀さだけでなく、練習への姿勢や努力という観点からベストプレーヤーを判断することが多かった。全部員の名前が毎日入れ替わって挙げられておりそのことから生徒が自己の特徴を十二分に発揮して練習に励んでいる様子が伺われた。

相互評価表は、部員がある程度お互いを理解し合ってきた9月初旬に、ねらいを十分に説明してから実施した。結果は、部員が趣旨を良く理解して他の部員を的確に評価していると思われるものが得られた。その結果から、生徒は大きな自信を得た部分と、かなりの精神的ショックを受けた部分があったが、チームメイトの評価を肯定的に受け止め理解しようとする姿勢が見られた。この相互評価の結果を踏まえて、その後のミーティングにおいてチーム内の自己の役割を自ら決定し、自己の特に努力すべき面（目標）を明確にすることができた。さらに、その役割と目標を練習に生かし、存在感や帰属感を高める結果をもたらしている。

今回の一連の取り組みで、生徒の自己理解や、教師と生徒、生徒と生徒の相互理解がともに深まり、お互いを認め合う望ましい人間関係に近づくことができた。また、集団内での役割や責任を自覚し、その遂行を通して自己を生かす方法を見いだすことができるような望ましい集団の形成においても、当初望んでいた以上の成果が得られたと判断している。しかし、一度築き上げられた人間関係であっても、それは時間の経過とともに変化するものであり、お互いを理解し合おうとする日々の努力がなければ維持・発展することはできない。また、その集団がさらに高い目標をもち、質の高い集団に発展するためには、教師と生徒、生徒と生徒が今以上に相互理解を深め、信頼関係を強くすることが必要とされる。したがって、今回の実践のような地道な取り組みが、今後においても継続的に行われ積み重ねられていくことが最も重要であると考えられる。

4 部活動2 一定時制高校における部活動指導の工夫

(1) ねらい

調査結果によると、高校を選んだ主な理由の一つの中に「高校卒業の資格がほしいから」が挙げられている。本校定時制課程においても「とにかく高校を卒業したい」という気持ちで入学した生徒が多くいる。彼らは何らかの形で仕事に就き、朝から夕方まで一生懸命働き、その後学校へ通って来ている。そのような生徒が「高校卒業の資格」以外に「この学校を卒業できて本当に良かった」と実感させたいと考えた。そこで、生徒がもっている共通の興味や関心を追求できるもので教師の適切な指導の下、生徒の自発的・自主的な活動が行われる部活動に焦点を当てた。

部活動を指導する上で、ア 教師と生徒、生徒と生徒の出会いを大切にして新しい集団を形成すること。イ 集団としての目標を設定するとともに、共に目標に向かって協力し合える人間関係をはぐくむこと。ウ 集団内での自分の役割を自覚し、責任を果たそうとする姿勢を育てること。エ 生徒が他の生徒を積極的に評価すること。オ 集団内で自分の意見や考え方を素直に表現できるようにすること。カ 集団としての活動を通して達成感や充実感をもたせること、などに配慮した。そして、集団としての野球というスポーツの特性に着目して、教師は野球経験者や野球が好きな生徒に野球部の創部について熱く語りかけ、平成6年6月から練習を始めることになった。以下にその実践を紹介する。

(2) 対象

- ① 部員数（平成8年10月現在） 14名(4年 4名、3年 5名、2年 3名、1年 2名)
- ② 野球経験の有無 経験者 3名、未経験者 11名

(3) 部活動運営に当たっての方針

① 活動に当たっての約束事

仕事や授業で忙しい中で、持続して部活動を続けるためには、一人一人の部員が互いに理解し合うことが必要であり、顧問と生徒、生徒相互の間に信頼関係を築くことが不可欠であった。そのために、次の二点を部の中での共通認識にしようと考えた。

第一に、基本的なルールや責任を果たすことである。安易に時間や約束事を守らないことが、互いの不信感を生む。ささいなことから、人間関係のいざこざが起り、部全体の活動が低下してしまうことがある。楽をしてよい思いをしようという生徒や、自分のしたことが相手にどんな思いを与えたかに頓着しない生徒に、ことあるごとにルールの大切さを説明していった。

第二に、目標をもって精一杯努力することである。勝つために、互いが全力を挙げる。その姿を認め合うことで信頼感が生まれる。「東京都大会で優勝」という高い目標を掲げたが、始めから無理だと諦めていた生徒も、努力することで達成感をもち、試合に集中し、結果にもこだわりをもつようになっていった。

「野球が好きで楽しくてしょうがない」「練習に行けばみんなと会える」という気持ちが生まれてきた。また、「せっかく集まってくれた人に申し訳がない。絶対勝てるチームにしよう。」(卒業生の文集から)と考えるリーダーが、休みがちな部員を励ましたり、いざこざの仲裁に入るなど、リーダーシップを発揮して、部全体をリードしていった。

② 顧問の指導姿勢

部員は、上から命令されるような指導には反発することが多い。また、小・中学校で、教師に認められた経験や、教師との人間的な触れ合いが少ない生徒が多くいる。そこで、顧問自身が部員と同じ練習を行い、野球がうまくなるために努力する姿勢を示し、部員と対等の立場で部の運営や活動に参加するような指導を心掛けた。練習の合間や、練習後の何気ない雑談の中から、部員の抱えている悩みを理解したり、野球部への思い入れの深さを理解することができ、生徒も、家庭の問題や交友関係、仕事での問題などを相談するようになっていった。

(4) 相互理解のための工夫

部活動の中で、一人一人の部員が自分の役割を自覚し、責任をもってその役割を果たそうとすること。互いの努力の跡を認め合い、励まし合いながらチーム全体を活性化していくこと。そして、短い練習時間の中で、競技経験者が少ないチームが「東京都大会での優勝」を目指して効率よく練習すること。この3点を具体化するために、次のような運営上の工夫を行った。

① ミーティングの工夫

どんな生徒にも自分なりの輝き方や存在感があることを知ってもらうためにミーティングを工夫した。試合中、通常スコアブックを利用するが、競技経験が少ない部員には複雑であり、なるべく一目で分かる文章中心の記録（資料1）を取るようにした。その後のミーティングでは、活躍した

資料1. 試合後の反省のための記録

11月28日(土) 工業 対 高校				高校			
0 1 2 0 0 0 0 3							
1 0 0 0 0 2 1 4							
工業				高校			
ピッチャー	サードゴロ エラー①	三塁	ピッチャー	ピッチャー	ショートゴロ	ピッチャー	エラー
捕手	セカンドゴロ	センターフライ	三塁	ピッチャー	ショートゴロ	ピッチャー	エラー
アドボカール	セカンドゴロ	ピッチャー	サードゴロ エラー②③	ピッチャー	ショートゴロ	ピッチャー	エラー②③
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
サードゴロ エラー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
三塁	三塁(裏り逃げ)③	三塁(裏り逃げ)②③	三塁	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー
ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー	ピッチャー

自己記録
ピッチャー 4本
捕手 9本
アドボカール 4本
ピッチャー 7(試合中)

外野飛球 5
内野 12

試合のつらさ
全体的に守備が安定
ハッスルプレイが多かった
ピッチャーでも強盗で守った
泣く声を出していた

試合のつらさ
打球が多かった
チャンスを決めきれなかった
ピッチャーでもエラーが出た
途中で寝てると思ってしまった

部員の成果を称賛し自信を付けさせるようにした。また、活躍できなかった部員には、何が足りなかったかを客観的に考えさせ、その後の練習に生かしていけるようにした。さらに、なかなか上達しないが地道な努力を続けている部員には、その姿勢が大切であることを強調し、ほめ讃えるようにした。これらのことを継続的に行うことによって、努力している部員がチームの中で尊重されるようになっていった。また、技術的に優れた部員や上級生はリーダーとしての役割を自覚するようになるとともに、技術的に未熟な部員には真面目に努力し続けることが自分にとってもチームにとっても大切であることを理解してくれた。

② アンケートによる相互理解の工夫

チーム結成から1年半が経過した時点で、部員の間では親しい人間関係ができあがってきたが、昨年まで強力なリーダーシップを取っていた生徒が卒業したこともあり、「東京都大会で優勝」という目標への意識の違いが大きな問題となってきた。特に、上級生の多くは卒業を控え、野球が好きであること以上に試合で勝ちたいというどん欲さが出てきていた。一方、下級生は「十分に頑張っている」「部活動は楽しくやるのが一番である」と言う考えで留まってい

た。そこで、普段話しにくい友人への思いや評価、不満などをアンケートに書くことによって出し合うようにした。1、2回目のアンケートでは、本当に言いたいことを書いているとは思えない状態であったが、継続して書くことによって、自分に対する客観的な評価や、他の部員に対する率直な意見や、真剣な注文もみられるようになった。多くの部員が1時間以上もかけて文章化し、自分の気持ちを整理して書くようになっていった。

その後、アンケートを基にして、リーダーシップをとってもらいたい4年生と顧問で話し合いを行った。その中で、4年生の「東京都大会で優勝」という気持ちを強要するのではなく、下級生の様々な気持ちを認めた上で、チームの目標を実現するための方策を考えた。そして、4年生が率先して、ア 練習や片付けを行うこと。イ 下級生を理解し、育てて行こうという姿勢で接すること、等を決めた。話し合い後、4年生の中には仕事や学校の合間などにも自主的にバッティングセンターに打ち込みの練習に行く部員もでてきた。このような4年生の姿勢が徐々に下級生にも浸透していき、チームとしての目標を互いに共有することができるようになった。

資料2. アンケート

野球部 「秋季大会に勝つために」

野球部を続ける目的 「 自己の人的成長 」
 野球部の目標 「 秋季大会優勝 東京で一番のチーム作り 」

1. 自分を知らう

① なぜ野球部に入部したのか？ 野球部をどうして続けているのか？

野球が好き 色んな方面でいろいろとやるのが好き

② 野球部の今の状態をどう思うか？ 優勝するには何が足りないか？ (具体的に)

状態はよくない、人があつた方がいいが、野球をうけるな、優勝までのぞき
 という、たまたま楽しく野球をやろうとしかしにた、きま、毎日感している、かわらない
 練習の時間をもっとほしいが、試合の練習が、試合の練習が、試合の練習が、試合の練習が

③ 自分のプレーや精神面の良いところ、悪いところ

	良いところ (強み)	悪いところ (弱み)
守備	外野をわけてやる、ボールを捕まえてきた。	むりやりにこぼすことがある。
打力	ランナーをかえす、ベースボールにまわると考えている。	ただカーブがよくない。
走塁	練習でハットで走れるようになった、とにかく走りたい、次の塁をめざしている。	また、ベースボールのミット、どるのか、むすかしい。
精神面 その他	とにかく走りたい、とにかく走りたい、とにかく走りたい、とにかく走りたい。	試合においてイライラしたり、おこりやすくなる。

④ 自分にとって、今一番必要な練習は、どういう練習か？

かくじつととれるというまでの、練習、カーブ打ち

2. チームメイトを知らう

① チーム全員の長所、短所を考えてみよう (技術、性格、その他)

メンバー	長所	短所
1	いいボールを投げられる、ボールを投げられる、ボールを投げられる、ボールを投げられる。	ボールを投げられる、ボールを投げられる、ボールを投げられる、ボールを投げられる。
2	練習が好き、練習が好き、練習が好き、練習が好き。	練習が好き、練習が好き、練習が好き、練習が好き。
3	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。
4	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。
5	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。
6	チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい。	チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい。
7	練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな。	練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな。
8	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。
9	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。
10	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。
11	チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい。	チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい、チームメイトに優しい。
12	練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな。	練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな、練習が好きな。
13	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。	走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い、走塁が速い。
14	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。	守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている、守備がしっかりしている。
15	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。	打力がある、打力がある、打力がある、打力がある。

② チームの中で自分がいま、見習いたい人は誰か？ その人のどういう所をいいたいと思うか？ どうやって近づこうと思うか？

見習いたい人

敬称

敬称

③ チームの中で、野球の実力がある人は誰か？ うまいと思う順番に9位まで名前を書こう

① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____ ⑤ _____ ⑥ _____ ⑦ _____ ⑧ _____ ⑨ _____

3. 勝てるチームになるために

新チーム結成から2ヶ月あまりでベスト8に入れたことは誇りに思う。ただし、中心は昨年から続けて成長した4年生の人でした。自分はチームに必要な戦力でしたか？ チームの空気を乱したりしていませんか？ 今のままで秋の試合に出れますか？ 勝てる力がありますか？

(5) まとめ

「何か充実したことをやりたい」と考えない生徒はいないというのが、部活動を通しての私の実感である。本校の野球部は生徒減の影響もあり、来年9人集まるかどうか分からない。定時制では、部活動そのものが成立しないのだという考えもある。しかし、「毎日毎日、授業が終わってからの野球が何よりの楽しみ」(卒業生の文集から)という声からも、定時制における部活動の意義はあると考える。

- これまでの実践を踏まえて、次のような課題が残っている。
- ア アンケートでの意見交換から、生徒相互が意見を直接交換し合う場面や機会の設定。
 - イ 勝つことを目標にする部員と、楽しくやることを目標にした部員の間での、統一した目標の設定。

V まとめ

本年度教育研究員は「集団の一員としての相互理解を図り、自己を生かす能力を養う指導の工夫」という主題を設定して、特にホームルーム活動と部活動に焦点を当てた。教師と生徒、生徒と生徒が互いに理解し合い、相互に作用しながら、生徒一人一人が全人的な発達を遂げ、所属する集団の改善・向上を図り、望ましい集団を築くための指導について研究を行った。

アンケートを行い、その結果から次のような特徴が読み取れた。

ホームルームでは、① 仲の良い友人がいることがホームルームの楽しさに影響している。② ホームルーム集団がいくつかのグループに分かれている。③ 生徒相互に理解し合う関係が希薄である。④ ホームルーム活動で積極的に役割を果たそうとしない傾向がある。

部では、① 半数以上の生徒が部活動を行っている。② 部活動に充実感や達成感を求めている。③ 部活動で自分の役割を見いだしやすい傾向にある。④ 退部の原因は人間関係と時間に拘束されることにある。

そこで、アンケート結果を分析・考察して、ホームルーム活動と部活動の指導方法の工夫についての、三つの提言（P10からP11参照）と四つの実践事例を以下のように示した。

【実践事例】

- | | |
|------------|----------------------------|
| ○ ホームルーム活動 | (1) 生徒と教師が心を通わず学級経営 |
| | (2) 相互理解を深める指導の工夫 |
| ○ 部活動 | (3) 相互理解を深め、役割の意識を高める指導の工夫 |
| | (4) 定時制高校における部活動指導の工夫 |

これらの実践事例から、「集団の一員としての相互理解を図る」ための指導では次の観点が必要である。① 教師が生徒との心の通い合いを図っていくこと。② 教師が生徒の視点に立って生徒を理解していくこと。③ 生徒に自己理解を深めさせること。④ 教師や生徒が他の生徒を積極的に評価すること。⑤ 他の人の評価を受け入れ、客観的かつ的確に自己評価をさせること。⑥ 信頼関係を築き上げさせること、などである。

また「自己を生かす能力を養う」ための指導では次の観点が大切である。① 生徒に自分の良さを気付かせること。② 生徒の良さを教師や他の生徒が認め、励ますこと。③ 生徒に自分の役割を自覚させ、その役割を遂行するように支援すること。④ 集団としての目標を設定して、互いに助け合いながら問題を解決していくこと。⑤ 自らの役割や集団としての目標を達成させることによって自信を付けさせること、などである。

課題としては、① 生徒の自主的・実践的な態度をはぐくませる観点、② 生徒の側にたったホームルーム活動や部活動の評価の観点などが挙げられる。

これらの観点を踏まえながら教師が、常にホームルーム活動や部活動の在り方についての課題意識をもつことが大切である。また、生徒が、集団の一員としての相互理解を図り、自己を生かす能力を養えるように、あらゆる機会を設定し、計画的・組織的・継続的に粘り強く指導と支援を行っていくことが重要である。このことにより、生徒の所属感や連帯感が高まり、互いに人格を尊重し合える望ましい集団を築くことができるのである。